

1

教材研究 はじめの一步



今春から教科書が新しくなり、教材研究に取り組まれている先生も多いことでしょう。さまざまな学校の校内研究にかかわっていらっしゃる輿水先生に、教材研究の基礎・基本について、連載していただきます。

はじめに

「国語って、何をどうやって教えればいいのかからなかったのです。教材研究って大事なんですね」

「文章の中に、こんなしかけがあったなんて、初めて読んだときには全く気づきませんでした。教材研究っておもしろいですね」

「どうして、子どもたちからああいう反応が出たのか、やっと納得できました」
いろいろな学校で校内研究にかかわる機会が増えた。多くの学校では、研究協議会が終わってから、別室で質問時間を

設定している。冒頭の会話は、教材研究の楽しさ、おもしろさをあまり経験してこなかった若い先生方からよく聞かれる声である。一方、経験を積んだ比較的ベテランの先生方からはこんな声も聞く。
「新しい教材が増えて大変です」
「それだけでなく忙しいのに、また、教材研究から始めなくてはなりません」
「同じ教材でも、今までと比べて配当時間数が短くなっています。教えきれません」

職員室の本音であろう。今までの経験をどう生かしてよいのか、果たして使えるのか、若干の不安を含んだ声に聞こえる。

こうした声を受けて、教材とは何か、教材研究とは何のために、どのように行うのが効果的か、よく言われる「教科書を教えるのではなく、教科書で教える」とは具体的にどういうことを言うのかなどについて述べていきたい。ここで取り

読者の視点で

まずは、「読者の視点」から純粋に内容を楽しんで読む。教科書に採用されている文章は、専門家が多くの時間と協議の末に選びに選んだ作品である。内容も、表現も価値の高いものが掲載されている。まずは、読者として文章と出会うことを勧める。

読後の余韻を楽しめる教材であれば、その感動を子どもたちと共有したいはずである。いいなあと思ったところ、すごいなあと思ったところを簡単にメモする。気に入った表現、気になった言葉や叙述

指導者の視点で

には印をつけたりサイドラインを引いておいたりすると、感動や感想の根拠が明確になり、あとで誰かと感動を交流し合うのに役立つ。中には作者が何を訴えたのかよくわからないという感想もあろう。そのこともメモしておく。ある意味この直感的に「感じる力」が大切である。児童に書かせる「初発の感想」に通じるものである。高学年の長い作品でも、「読者の視点」で読んで、感想をメモし、その根拠にマーキングするのに必要な時間は数分である。

子どもの視点で

次に、「子ども（学習者）の視点」で読む。そのとき、必ず声に出して読むことが大切である。句読点まで読む。読み間違いやすいところ、意味がわかりにくいところ、難語句、新出漢字について確認し、学級の子ども一人一人の顔を思い浮かべながら音読する。これは、通読するのに必要な時間の把握や「範読」の練習にもなる。

読み終わったら、「学習の手引き」を

開く。この学習活動でどのような反応を示すだろうか、子どもの視点で想像しながら実際にやってみる。ノートを作成してもよいが、本文をコピーして自分の考えを書き入れてみるのが効率的である。
新しい知識や技能は何か、既習の学習で活用できるものはないか、子どもたちの生活体験と比較してわかりにくいところはないか……学習活動を体験することと児童理解も深まる。子どもたちが必要とする時間の五分の一もあれば十分である。十時間扱いでも正味一時間で大丈夫。時間内で苦勞するようなら、子どもの気持ちを知り、実感をもつて理解できる特典もある。

さらに、「たいせつ（※）」を確認し、視写する。子どもたちにわかりやすく板書するためにリライトしてみてもよい。その後、「本は友達」に出ている作品を図書室で探す。できれば、いくつか読んで紹介したい本を選ぶ。子どもの視点での読みを楽しめるようになると、教材研究は八割達成。



さて、いよいよ「指導者の視点」での読みに入る。仕上げの二割である。指導者の視点で忘れてはならないのは、作品の初めのページに示してあるその単元のねらいである。単元の指導が終わったとき、このねらいが達成できたかどうかの評価の対象になる。評価意識をもち、子どもたちが全員評価規準を達成できるように支援することが必要だからである。
教師用の指導書別冊（朱書編）と自分の学習活動での書き込みを比較してみると、読みの深さや叙述の捉え方の参考になる。自分が気づかなかった書き込みがあれば、自分のコピーに書き加えておくと深みが出る。最初から教師用指導書に頼りすぎると、教材研究の楽しさは半減する。「自分の考えをもち」、それを相互に交流することで深めたり広げたりすることが、いま最も求められている力である。未熟でも、不完全でもよい。自分の考えをもつ楽しさを実感してほしい。
新しい単元に入るときは、ぜひ、以上三つの視点で読んでみることを勧めたい。